

# マルコム X の言葉

荒 このみ

## 1.

1960年の初め、マルコム X (1925-65) が日本で初めて<黒い回教徒>として紹介されたときの新聞紙上での扱いが記憶に残っている。それほど新聞の扱いがセンセーショナルで衝撃的だったからだろう。

1950年代からアメリカにおける黒人差別撤廃運動は日本においても少しずつ報道されるようになっていた。特にマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師 (1929-68) は、50年代半ばに起きたモンゴメリー・バス・ボイコットを成功に導いた若い指導者として名前が挙がっていた。ところがマルコム X の場合はまったく扱いが違う。アメリカでは今、「黒い回教寺院」という暴力的な組織の活動が盛んになってきており、その指導者のひとりであるマルコム X は、攻撃的な言葉で黒人大衆をかく乱し、危険な思想を振りまいている。暴力をものともしない恐ろしい考えを広めている、という内容だった。

当時の日本の報道は、特派員の独自の感覚や調査をもとにして書かれたのではなく、ほとんどがアメリカの新聞の受け売りだったのだろう。中学生だった私は、恐ろしい顔つきをしたマルコム X が人差し指を突き立てるようにして激昂して演説している写真に、これは暴力的な黒人であるという否定的な印象しか受けなかった。

マルコム X が全米的に認知されるようになったのは、1959年に放映された連続ドキュメンタリーのテレビ番組「憎悪が生み出す憎悪」だった。マルコム X は、<黒い回教寺院>すなわち<ネイション・オブ・イスラム>の最高指導者だったイライジャ・ムハマドよりはるかに雄弁家であったから、テレビの取材には打ってつけだった。この番組がマルコム X と<ネイション・オブ・イスラム>を紹介したことで、地方のごく小さな宗教組織が全米的に知られるようになり、組織として飛躍する契機になり、マルコム X 自身がその影響力をさらに大きくすることになった。その要因はなんといってもマルコム X の言葉の力だった。

ところが今日でも日本における中学・高等学校や大学の教育現場で、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアとマルコム X を対照的に扱い、前者は平和主義者、後者は危険な暴力主義者という誤った像を教え込んでいるのはどうしてなのだろうか。新聞などで作られる世論に左右され、それを鵜呑みにして自分の判断の根拠を示すことを忘れる傾向があるが、それはきわめて恐ろしいことである。なぜならそれは対象がマルコム X に限られたことではなく、今日の日本の社会のさまざまな場面で見受けられる傾向だからである。自分で判断をせずになやすく付和雷同する、それを私たちはもっとも警戒せねばならない。

## 2.

マルコム X とマーティン・ルーサー・キング・ジュニアは同世代を代表するアフリカン・アメリカンで、公民権法が成立する前のアメリカ社会で、黒人運動が活発になっていく時代を担った二人の重要な指導者である。じつはキング・ジュニアに対しては指導者という呼び方が当てはまるのだが、マルコム X の場合は、指導者と呼ぶよりカリスマ的な影響力を持った人物という表現のほうが、その立場をよく説明しているだろう。キング・ジュニア牧師はキリスト教会という組織のもとに活動を始め、1957年には〈南部キリスト教指導者会議〉を結成している。いっぽうマルコム X の場合は、〈ネイション・オブ・イスラム〉組織の指導者はあくまでもイライジャ・ムハマドであり、自分はそのもとで働く伝道師にすぎないと自己規定している。のちにムハマドから破門されるのだが、マルコム X は最後までムハマドを父親のように慕っていたきらいがある。マルコム X には組織の指導者になる素質はなかったのではないか、指導者になるにはあまりにも不器用な人間で、まったく政治的人間ではなかったというのが、私の見かたである。

マルコム X とマーティン・ルーサー・キング・ジュニアの演説を検討しながら、言葉の意味を探っていきたいのだが、ここでもキング牧師の〈私には夢がある〉という演説を思い出すことはあっても、マルコム X の演説を思い出すことは難しいだろう。これもまたハイブ（広告・宣伝）現象であって、発言の意味や意義を具体的に検討する前に、メディアによる価値観で恣意的に決定された像が広まり、それが大きな現象となって中身より形が先行してしまう、一般的な傾向をあらわしている。

## 3.

〈私には夢がある〉という演説は、1963年8月28日に開催された、職を求める黒人たちの大集会〈ワシントン大行進〉の折りに、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアが行った演説である。このときはフランスから駆けつけたジョセフィン・ベイカー（1906-75）を含め、何人もの人びとが演台に立ったが、もちろんキング・ジュニア牧師の演説がそのハイライトであった。その後、キング・ジュニア牧師の演説は日本で英語の教科書に採用されるようになり、多くの生徒たちに影響を与えることになった。その演説はどのような内容だったのか。

キング・ジュニア牧師は、この日、「自由への大行進」を参加者たちと共にしたことを嬉しく思うと言って演説を始めている。そして首府ワシントンへやってきたのは、アメリカ政府に対して、不渡りになった約束手形の換金を要求するためであると。すなわちアメリカの建国の父祖たちは、「奪うことのできない生命、自由、幸福の権利を、すべての人間に約束する」と独立宣言で高らかに述べているが、その約束手形が、「有色人種に関するかぎり、いまだに不履行」（アメリカの黒人演説集 278）であるとキング・ジュニア牧師は主張した。

たった今、黒人は固い決意をしてこの緊急の要請を突きつける。「黒人が当然の不满を抱く、うだるように暑い夏は、自由と平等の、活気に溢れた秋の約束がないかぎり過ぎ行くこと」（演説集 279）はない。「黒人が市民権を獲得する日まで、アメリカには安息も安定も」（演説集

279) ないのだと続け、「私には夢がある」と訴える。その夢とは、「アメリカン・ドリームに深く根ざし ( た ) 」 ( 演説集 281 ) 夢であるとキング牧師はいうのだが、それではアメリカン・ドリームとは何を指しているのだろうか。

キング・ジュニア牧師は、「万民は生まれながらにして平等である」という〈アメリカン・クリード ( アメリカ的信条 ) 〉が実現する社会、民主主義の原理が存分に作用する社会、それがアメリカン・ドリームの実現であると強調する。それを自分たち〈アメリカの黒人〉も手に入れなければならない。百年前に南北戦争の結果、元奴隷たちはアメリカ市民権を獲得したはずだった。にもかかわらず、戦後の南部諸州で制定されていった、ジム・クロー法と呼ばれるようになる黒人差別法によって、20 世紀の半ばを過ぎても、〈アメリカの黒人〉たちは社会生活のさまざまな場面で厳しい差別を受けている。今、その差別を撤廃し平等になるために、公民権法を成立させるために、〈アメリカの黒人〉たちは立ち上がらねばならないとキング・ジュニア牧師は聴衆を鼓舞した。

キング・ジュニア牧師は、アメリカのいたるところに「自由を響かせよう」 ( 演説集 283 ) と繰り返し語りかける。みんなが手に手を合わせてアメリカのいたるところで自由を響かせれば、その日が来るのが早まるのであり、黒人霊歌にうたわれるように、「とうとう自由に！ とうとう自由に。神よ、ありがたいことだ、神よ、われわれはとうとう自由だ！」 ( 演説集 284 ) という目的を成し遂げることができるのだと言って演説を結んでいる。

キング・ジュニア牧師の声は、福音派説教師の典型的な口調になって、最後にはきわめて情感たっぷりになり、聞く者の理性より感情に訴えかけ、ワシントンの空に鳴り響いていった。

〈私には夢がある〉というその夢は、「アメリカン・ドリーム」であるとキング・ジュニア牧師は言ったのだが、「アメリカン・ドリーム」とはアメリカン・クリードである民主主義の浸透を意味するだけでなく、もっと具体的にはアメリカ社会での成功を意味し、それはすなわち経済的成功であって金持ちになることである。

キング・ジュニア牧師はこの演説の中でしばしば資本主義の用語を使っている。「小切手を換金する」「不渡り小切手 ( バッド・チェック ) 」「正義の銀行 ( アメリカ ) 」「クーリング・オフ」など、日常的な金銭にかかわる用語を使って、〈アメリカの黒人〉が不当に扱われている現状をわかりやすく説明している。権利の主張、投票権を求めて、平等であること、などと抽象的な表現をしても理解されにくい。そこでキング・ジュニア牧師は一般にもっともわかりやすい経済的用語を使って訴えたのである。

さらにキング・ジュニア牧師は、ヴィジュアル ( 映像的 ) な表現を使い、みながたやすく想像できるように巧みに導いている。たとえば、「物質的繁栄の大洋」の中で〈アメリカの黒人〉は「貧困の孤島」に暮らしているという。絵画的にわかりやすく、いかにかれらが疎外されているか、「大洋」と「孤島」で強調される。あるいは元奴隷たちは、憲法修正条項第 13, 14, 15 でアメリカ市民になったはずであるのに、そうはなっていない現状を、「自分の国で亡命者」になっていると訴える。これもまた抽象的にアメリカ市民権の剥奪を述べるのではなく、具体的なたとえでわかりやすくアメリカ社会の矛盾を突いている。

## 4.

このように＜アメリカの夢＞が、＜アメリカの黒人＞にとっても実現可能であるという前提に立って語るキング・ジュニア牧師に、マルコム X は反論する。＜アメリカの夢＞は白人の夢でしかないのであり、決して黒人の夢ではない。＜アメリカの黒人＞にあるのは＜アメリカの悪夢（ナイトメア）＞でしかない。白人が＜アメリカの夢＞を実現するために、黒人は強制的に労働に駆り立てられ、＜アメリカの悪夢＞を見つづけるように仕組まれている。

＜ドリーム＞と＜ナイトメア＞という対立的発想は、マルコム X がよく使う典型的な対立のレトリックである。既成の言葉を逆説的に使用し、そこから常人の考えつかないような発想の転換をはかる。自分たち黒人はアメリカニズムの、アメリカン・システムの犠牲者であり、その目でアメリカ社会を見るのである。するとその目には「アメリカの夢」など映ってこないはずであり、＜アメリカの黒人＞は、「アメリカの夢など見ていない。アメリカの悪夢を見ている」（演説集 291）とマルコム X は続けている。ここにすでに二人の発想の根源的な違いがある。白人の描く「アメリカの夢」を追い求めるキング・ジュニア牧師と、それは黒人を否定して描かれる夢であるから、そもそも黒人が追い求める夢にはならない、という信念を持っているのがマルコム X である。

## 5.

「いわゆるニグロ」とマルコム X は言う。「ニグロ」と呼ぶのは白人の側であって、自分たちがそう定義しているのではない。だから自分たちは「ニグロ」ではないのだが、白人で構成される世間がそう呼ぶので、「いわゆる」という条件をつける。これは単純なことのようで、実はマルコム X 以前はだれも考えてもみなかったことだった。「ニグロ」という呼称に何となく差別と劣等意識を感じながら、それが白人の価値基準によるからそうなるのだ、と疑問を持ったものがいなかった。アメリカ社会において人物像、理想的な家庭像、理想的な結婚、理想的な教育などあらゆる領域において白人の価値基準が支配していることに何らの疑問も抱かず、私たちは何となく当然のこととみなしていた。だがマルコム X は、そうではないのだ、とわかりやすく問題提起をして黒人大衆を覚醒させる。

「いわゆる民主主義」という表現も使っている。アメリカ社会の本質であると認識されている理念だが、現状は決して民主主義の国家にはなっていない、とマルコム X は指摘する。

このように指摘されてみると、あらゆるものが権力を握っている白人の論理によって説明され、いかにかれら白人にのみ都合がよいように解釈されてきたか、その現実に愕然とする。近代世界が、いわゆるヨーロッパ主義に支配されてきた事実を明瞭にあらわしているだろう。これはアメリカ社会に限ったことではない。特に戦後占領下の日本社会を思い浮かべても、アメリカ的価値観、アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ（アメリカ的生活様式）、金髪碧眼を理想とする欧米的美意識などが、いかに私たちの精神構造に圧倒的な影響を及ぼしていたことか。知らぬうちに自分たちのものではない、かれら白人の価値観に私たちは圧倒され、圧迫されていたのである。それは 80 年代以降になって、文化複合主義・文化相対主義などと唱えられること

によって、ようやく一般的に気づかされたのだった。それをマルコム X は、〈アメリカの黒人〉が当然と受け入れてしまっていたことに、はるかに早い時期に気づいていた。そしてアメリカ社会の構造的差別を暴いたのだった。

マルコム X の批判者は、マルコム X がしばしば口にした「必要なあらゆる手段を使って」という表現を盾にとり、マルコム X は暴力的であると言って非難した。あらゆる手段とは武力・暴力をもいとわず、ということであると勝手に解釈するのである。ところがマルコム X が主張するのは、アメリカ社会における警察暴力が、黒人を標的に理不尽に振るわれ、黒人は被害者になっているという現実認識から、正当防衛であれば、黒人はあらゆる方法で立ち向かわねばならないと、不満を抱く黒人たちを急き立て、白人社会へ挑戦したのだった。黒人たちは、正当防衛の意味すら理解していなかったから、警察暴力の前でなされるがままで、マルコム X の論理的な反論の言葉に勇気を得たのだった。マルコム X は、暴力を駆使しろとけしかけたのではない。あくまでも正当防衛を強調したにすぎない。それにもかかわらず、メディアはマルコム X の暴力的な側面の一つの例として、故意に誤った解釈を流布したのだった。

## 6.

マルコム X は伝道師 (ミニスター) と呼ばれ、テンプルと称するネイション・オブ・イスラム寺院で説教していたが、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアのような教会組織に属する牧師ではなかった。伝道師としてその雄弁家の素質が十分に発揮されたが、臨機応変の演説を得意としたのであり、その演説をキング・ジュニア牧師のように自筆の原稿として記録する習慣はなかった。ラジオやテレビの録音・録画されたものから、他人が原稿を起こして出版されたものはいくつかあるが、そのような事情から、残念ながらあらゆる演説が残っているのではない。また演説は生き物のように言葉を変えて発展していったから、定稿というものは少ない。その中で暗殺される一年前、公民権法が成立する前の一九六四年四月三日にオハイオ州クリーヴランドで行われた演説「投票権か弾丸か」は、まとまった演説として今日、読むことができるものの一つである。

演説「投票権か弾丸か」もまた「弾丸」のほうが強調されているように喧伝された。マルコム X は、「投票権」を求めることを主張しているにもかかわらず、「弾丸」という言葉につられて、だからマルコム X は暴力的で危険だと強調されることになった。ところがもちろんこの言葉は、アメリカの独立戦争当時の反英運動の指導者パトリック・ヘンリー (1736-99) が、1775 年、英国のアメリカ植民地抑圧政策に足して、「自由を然らずんば死を」という言葉を背後に響かせている。当時、パトリック・ヘンリーは、英国がアメリカ植民地の自由を認めないのであれば、死という暴力に訴えるよりほかないと、極端な発想で訴えたのだった。

マルコム X の演説がなされた 1964 年 4 月は、投票権法はおろか公民権法もまだ議会を通過していなかった。議会では公民権法成立を阻止するために、しきりにフィリバスター (議事妨害の長演説) が実践され、いつまでたっても結着がつかない状況だった。その議員たちが選出されるにあたって、黒人票が大いに貢献したはずであった。今日において、大統領選挙で南部の

黒人票がいかに重要な意味を持つかは、オバマ大統領候補が南部を訪れたとき、オバマの英語が「黒くなった」と言われたが、南部の黒人に受け入れやすい話しかたをしたという事実にもあらわれている。だがもちろん、マルコム X を支持していた多くの下層階級の黒人たちは、そのような客観的な分析はできなかった。マルコム X に指摘されるまで、自分たちの重要性などまったく信じていなかった。

アメリカ社会が自分たちの祖先の奴隷労働によって繁栄していったという事実も認識していない。マルコム X はこのように、白人の支配するアメリカ社会の建設のために、いかに黒人労働が貢献してきたかをかれらに認識させたのである。

マルコム X はこの演説で、「アメリカ人とは」という問題も提起している。アメリカ合衆国に生まれ、何世代にもわたって暮らしているかれらがアメリカ人にはなれず、いっぽう移民船から降りてきたばかりのヨーロッパ人が、肌の色が白いという理由でたやすくアメリカ人になっていく、その矛盾を突く。肌の色が黒いから、自分はアメリカ人にはなれなくとも当然だ、と潜在的に埋め込まれている固定観念が、いかに誤りであるかをマルコム X は伝えている。

たしかにマルコム X が、「憲法修正なんて必要なかった」と言うように、アメリカ市民権がアメリカ合衆国で生まれた者に生得権としてあるのなら、何代もアメリカで生まれている元奴隷たちを、とりたてて「アメリカ人」にする憲法修正第 14 条など不必要だった。1868 年に成立した憲法修正第 14 条では、「合衆国において出生し、または合衆国に帰化し、その管轄権に服する者は、すべて合衆国およびその居住する州の市民である」とうたっている。それでは「アメリカの黒人」は「合衆国において出生し」ているのであるから、すでにアメリカ市民だったのではないか。マルコム X は、アメリカの歴史における奴隷制度がもたらした矛盾を、ここでも明らかにするのである。

この問題はアメリカ社会の根源的な課題であり、公民権法が成立し選挙権法が成立した今日でさえ解決していない。それはかれら「アメリカの黒人」を、いまだにアフリカン・アメリカンと呼んでいることに明白である。なぜかれらはアフリカンなしの「アメリカン」になれないのか。ついでに憲法修正第 14 条が批准され発効された時点では、「課税されないインディアン」は除かれていることも記しておこう。かれらアメリカ大陸で生まれている先住民インディアンが、アメリカ市民権を獲得するのは 1924 年になってからである。

マルコム X は過激なブラック・ナショナリストとして恐れられたが、自分は決して「アンチ白人ってわけじゃない」（演説集 188）と訴える。いうなれば「アンチ搾取、アンチ権利剥奪、アンチ抑圧」（演説集 288）なのであると。このように畳みかけて表現するのがマルコム X の演説の特徴の一つである。繰り返しによって強調し、印象を深く刻み込むのは修辞の常套手段である。キング・ジュニア牧師の「夢」の連発もその一つである。だが二人の言葉の違いは、キリスト教会の福音伝道師の引き延ばすような、情感たっぷりの南部訛りで語るキング・ジュニア牧師と、わかりやすい論理で、証拠を示しながら早口に畳みかけてくるマルコム X の演説の流儀に明瞭である。

マルコム X はしばしば聴衆から、「わかりやすく言ってくれよ、マルコム」と半畳を入れられ

た。だがそれはマルコム X が、これまでなじんでいた活動家たちの演説とは違って、教育の低いかれらにもわかりやすくアメリカ社会の状況を説明してくれたからである。とりわけハーレムに住む黒人たちは、マルコム X と同じように最低の義務教育しか受けていない者、犯罪者、警察暴力の犠牲者などが多かったが、同じような経験をしてきたマルコム X は、かれらが理解できるように、やさしい言葉で説明する能力に秀でていた。

## 7.

マルコム X が強調したもっとも大切なことは、「マンフッド (男らしさ・人間らしさ)」の回復であった。奴隷として人間性を否定されてきたかれらは、その後展開した差別社会で、自分に対する誇りを喪失させられていった。とりわけ黒人の男たちは白人社会で、その「男らしさ」を徹底的に否定され、いつまでたっても小僧扱いで、60歳をすぎていようが、「ボーイ」と呼ばれていた。人間であるという尊厳を忘れなければ生き延びてゆけない日常的な出来事は、白人と接する中で数限りなく存在し、リチャード・ライト (1908 - 60) はそれを『ブラック・ボーイ』(1946) の中で書き記している。自分に誇りを持つという本質的な人間の姿が、＜アメリカの黒人＞には見られない。生きるか死ぬかの状況で、自己の意思を主張することは困難だった。白人の前で卑屈にならざるを得ない歴史的体験は、20世紀の後半になってもかれら＜アメリカの黒人＞を精神的に縛り、自分の存在理由を見出すことができなかった。

自分であることとは、19世紀の思想家ラルフ・W・エマソン (1803-82) が、＜ノンコンフォームィティ＞を唱えて、若いアメリカ人へ向けて発した言葉だった。寄らば大樹の蔭という姿勢を戒め、自分の足で立つこと、そうならなければ＜マン (大人) ＞として認められないとエマソンは説いた。マルコム X もまた、＜マンフッド＞を唱えて、白人のようになることを推奨したのではなく、本来的な自己の回復を強調したのだった。

後に70年代になってマイノリティ・グループや女たちの＜意識高揚運動＞が盛んになっていったが、マルコム X はキング・ジュニア牧師とは対照的に、50年代から黒人の＜意識高揚運動＞に力を入れていた。＜アメリカの黒人＞が誇りを持つためには何をしたらよいのか。マルコム X が服役中に図書館を利用して勉強したように、そしてその中から自分自身について、黒人の文化的背景、歴史を知ることの重要性に開眼したように、教育の乏しいかれらに自分たちのことを知る大切さを強調し、繰り返し語りかけ、認識させていったのである。

それは＜ネイション・オブ・イスラム＞が開いていた＜イスラム大学＞でみずから教壇に立ったことにもあらわれている。マルコム X はそこで、白人が支配するアメリカ社会の仕組みを説明しようと努め、社会の動向を知ることが重要であると教え、しばしば新聞記事を取り上げて、世界の動きに目を向けるように奨励した。

だがときには強引で滑稽とも見なされるこじつけをしている。たとえば＜デモクラシー (民主主義) ＞という＜アメリカン・クリード (アメリカ的信条) ＞を解釈する。FBI の記録によれば、マルコム X は、＜デモ＞と＜クラシー＞を分解して、＜デモ＞とは＜デーモン (悪魔) ＞と語源を同じくするのであり、＜クラシー＞はギリシア語で＜政府＞を意味するのだから、アメリカ政府は＜悪魔の政府＞になるという三段論法で説明した (マルコム X124)。そうやっ

マルコム X は、「白人は悪魔だ」と唱えるイライジャ・ムハマドの教えに、学問的根拠を与えようとしたのだろう。

そのような牽強附会もあったが、〈ネイション・オブ・イスラム〉の教えにしたがひ、メンバーは苗字を X に変えるという発想は革命的だった。これはマルコム X の発案ではないが、マルコム・リトルをマルコム X に変えたのは、自分たちの苗字が白人支配者の名前を引きずっているからであった。

マルコム X の祖先はジョージア州タルボット郡の白人農園主リトルのもとで働く奴隷だった。かれら奴隷たちはアフリカ大陸からアメリカ大陸へ強制的に連れて来られる間に、本来の名前を喪失したのである。それゆえ自分たちの苗字は不明で、数学で不明を意味する X を使って自分たちの自己証明を代替したのである。この発想は画期的だった。名前の喪失は自己を失うことであり、奴隷解放令が発令されたところで、〈アメリカの黒人〉の自己証明が確立したのではなかった。X への改名は、実は深く複雑なくアメリカの黒人〉の抱える根源的な問題を示唆していたのである。

このように名称にしる、アメリカ的信条である民主主義にしる、慣習的表現にしる、世間の常識になっている価値観を今一度見直そうとした〈ネイション・オブ・イスラム〉の姿勢は、そしてとりわけマルコム X の姿勢は、白人の価値観を当然として納得していた者たちすべてへの警鐘でもあった。とはいえそれに気づいていた者は少なく、マルコム X の演説は、極端で滑稽な発想に満ちていると軽蔑され、あるいは不可解として無視されることが多かった。

マルコム X は、勉強せよ、自分たちの歴史や文化を理解せよ、と唱え続けていた。「知ること」によって初めて自分たちの尊厳を回復することができると思っていたからである。マルコム X の存命中には実現しなかったが、60年代後半になって大学でカリキュラムに加えられていく黒人研究（ブラック・スタディーズ）は、まさにマルコム X が唱えていたことだった。黒人研究などあり得ない、かれらには文化もなければ研究するような歴史もない、という世論が支配的な中で、やがてブラック・スタディーズ講座が各大学に設置されるようになっていった。今日、オバマ大統領が登場した背景には、このようなカリキュラムの変化を通して、黒人のみならず、アメリカの白人たちが黒人について知ることになったことと深く関係している。お互いに無知であった領域を学ぶことによって、お互いの存在に対する理解を深めていったことは事実である。

## 8.

マルコム X の遺産は、このような長期的展望で〈アメリカの黒人〉のアメリカ社会での存在理由の確立に貢献したことである。「人種差別学校システムは犯罪である」とまで言い切ったマルコム X は、教育の重要性を説いていた。

「妥協のない態度でやるんだ。といって暴力を振るえと言っているのではない。だがな、たまたま非暴力になるのは別だが、非暴力戦略は取るな。私は非暴力の相手には非暴力で行く。あなたがたが私に暴力を振るえば、あなたがたが私を狂暴にさせるのだから、自分の行動に責任は持てない。ニグロはこの態度でやって行くんだ」（演説集 303）。

このように宣言したマルコム X は、キング・ジュニア牧師の率いる公民権運動では、アメリカ社会の差別構造はなくならないことを強く意識していた。かれらは<ウィ・シャル・オーヴァーカム——いつか乗り越える>と歌いながら行進するが、そのように悠長な受身の態度ではいつまでも目的を達成することはできない。さらに公民権を求めるというのは、アメリカ市民になることであり、そのアメリカ市民のありかたは白人によって定義されている。そのアメリカの価値観へ自分たちも統合される ( インティグレイト ) のを願うのは本末転倒である、と主張し、キング・ジュニア牧師の運動は本質的に間違っていると批判したのだった。

たしかに<私には夢がある>という演説でも、キング・ジュニア牧師は、既存のアメリカ社会へ自分たち<アメリカの黒人>を受け入れてもらうことを願っている。そうではなくて、自分たちもまた一人の人間としてアメリカ社会を構成している、というのがマルコム X の主張であった。それはラルフ・エリスン ( 1914-94 ) が、<ニグロのイディオム>という表現でアメリカ文学を分析したこととも重なっている。エリスンは、自分はアメリカの作家であり、自分の文学は<ニグロの文学>として狭い領域に押し込められるべきものではないと述べている。

そもそも<ニグロの文学>もまたアメリカ文学を構築している一つの構成要素なのである。黒人作家も他の作家たちもアメリカ人作家として存在しているのであり、お互いに分離して存在しているのではない。<ニグロのイディオム>はまさにアメリカ社会の特質を作り上げている条件である。

公民権法が成立する以前、黒人もアメリカ社会に統合 ( インティグレイト ) され、受け入れてもらうことが最大の到達目標であると、多くの人びとが認識していた時代に、マルコム X はそのような卑屈な希望を抱くのではなく、自己の尊厳を持つようにと強く説いていた。黒人大衆を覚めさせようと努力していたのだった。

1964 年、長期のアフリカ滞在を経たマルコム X は、この考えを発展させ、<アメリカの黒人>が求めるのは、公民権ではなく人権であるという信念を持つようになる。自分たちが闘うのは、アメリカ社会における黒人差別の問題ではなく、アメリカ社会で人権が蹂躪されているという普遍的な問題の解決を求めてなのである。そうであれば国連に訴えて、世界の諸国からの代表たちに考えてもらい、審議してもらうことができると期待したのだった。

ところがマルコム X は、アフリカでの長期滞在を終えた翌年の 2 月 21 日に暗殺されてしまう。<ネイション・オブ・イスラム>を離れてからの活動は実を結ぶことなく、中途半端に終わってしまったのである。

「投票権か弾丸か」のなかで、マルコム X は投票権を持つことの意味を認識していない黒人大衆に向かって、「投票権とは自由を意味する」( 演説集 306 ) のだということを強調した。死により初めて自由になる、という黒人霊歌を想起させる「とうとう自由に」という句をマーティン・ルーサー・キング・ジュニアは繰り返すが、その口調のみならず、信念のありかが根源的に相違していた。「投票権か弾丸か」という演説で、マルコム X は、自由の意味を問い、自由を獲得する具体的な手段を提示したのだった。

いつまでたっても<よそ者 ( エイリアン ) >であり、<二等市民 ( デニズン ) >とみなされるアフリカン・アメリカンの立場にマルコム X は、当然ながら怒りを覚えていた。

黒人解放の闘争史をひもとくと、元奴隷だったブッカー・T・ワシントン（1856-1915）は、＜二等市民（デニズン）＞の立場を甘んじて受け入れ、＜社会的平等＞は求めないと宣言した。時代背景を考慮するとそのような卑屈な態度も致しかたなかったのだろう。＜社会的平等＞、すなわち日常生活において白人と黒人は分離して暮らし、決して白人の領域へ侵入することはない。分離学校、分離された公共交通機関、宿泊施設、水飲み場などをすべて認めて、それによってブッカー・T・ワシントンは、黒人の生活改善のための資金を白人資本家たちから獲得したのだった。

だが半世紀後のマルコム X の時代には、〈アメリカの黒人〉たちはそれでは納得できなくなっていた。マーティン・ルーサー・キング・ジュニアは、分離ではなく統合を求め、アメリカ社会に受け入れられることをひたすら願ったが、マルコム X は、一人のアメリカ人として個人として認められる社会を望んでいた。そのためには白人を変えようとするのではなく、自分たち自身が変わらなければならないと考えていた。人種差別・人種分離（セグレーション）とは自分自身を失い、他人によって支配されることであると語り、ここでもまた＜セグレーション＞を新しく定義しなおしたのである。

マルコム X は、逆説の弁論術で聴衆を鼓舞し、なおかつ単純で本質的な言葉でわかりやすく問題点を説明した。教会の牧師のような説教壇の高みからの発言ではなく、道徳的な高みから説教するのでもなく、黒人大衆の置かれている現状に自分自身を置いて考え、かれらを鼓舞したのだった。それはかれらの不満をよく理解していたからこそ可能だったのだろう。そして自分たちの要求が決して理不尽ではなく、かえって正当性を備えていることを納得させたのである。

マルコム X の言葉は、ハーレムなど大都会のスラムで虐げられ、差別され、劣等意識を植え付けられていた黒人大衆の心をつかんでしまう、強い力に溢れていた。

## 引用文献

- 荒このみ著『アフリカン・アメリカン文学論——「ニグロのイディオム」と想像力』東京大学出版会、2004年。
- 荒このみ編訳『アメリカの黒人演説集』岩波書店、2008年。
- 荒このみ著『マルコム X』岩波書店、2009年。